

# 令和元年度第1回エコエリアやまがた推進協議会 議事録

日 時：令和元年9月11日(水)

午後1時30分から午後3時30分まで

場 所：山形県建設会館3階 中会議室 No.1

## 協議事項

### ・環境保全型農業の今後の推進方向について

#### 1. 推進の目的について

##### 会長

最初に今後の推進方法について議論していきたい。

推進の目的について、生産者の立場からこれまで以上にGAPを推進していくことが必要になると思う。環境保全型農業だけではなく、食品安全等についても一体的に進めていく必要があると思うが、委員より意見を伺いたい。

##### 委員

GAPの取組みのハードルが高く、足踏みしている農家が多い状況。有機JASをしている農家からするとさほどハードルが高くない、県版GAPは入口としてありがたい制度だと思っている。

環境直接支払交付金について、GAPが要件として採用されたため、農家にとって制度に慣れていくSTEPになっている。ただ、現場ではスムーズに取り組むことができない農家も多いと感じているため、きめ細かいフォローをいただければ、もう少し広まると思う。

##### 会長

方向性としてはわかるが、ハードルがあるということか。

次は実需者という立場から見て、商品安全・環境保全への取組みについて、消費者はどのように考えたらよいか。

##### 委員

お客様に食を提供する立場からすると、食の安全が確立しているものを提供できることはメリット。これからも進めていくことは良いことだと思う。だが、それをどう消費者に伝えていけばよいかわからない。

有機農業でつくったものが良いことは誰もわかっていると思うが、それを食として提供する際、消費者側からすると有機農業で栽培したもの、化学肥料を使用したものの違いがわからない。

食を提供する側からすると有機農産物を料理に使用することは、宣伝効果はある。一方で、消費者側からすると根本的に値段が高くなる。いくらでも安くしてほしいというのが消費者側の意見だと思う。良いものなのはわかるが、安くして量を増やしてほしいという意見もあるので、なぜ高いかをわか

りやすく世間に広めていけば、こちら側からも値段が高くて消費者に勧め易い。消費者が納得できるような環境ができれば、料理に使い易くなるのかなと思う。

#### 委員

調理師のなかでも、有機農業について全然わからない人もいる。どうやって使えばよいのか、どこから仕入れればよいのか。生産者と料理を提供する側のラインづくりが必要。

私のようなホテル関係者であれば、ある程度まとまった量がないと使えない。安定した供給と価格を提示してもらえれば使っていけると思う。まずは有機農産物について広めていただければ、協力できると思う。

#### 会長

消費者側から安心・安全というものはどの程度評価されていると感触として持っているか。

#### 委員

長年米を中心に栽培、販売しているが、有機 JAS をつけたから評価が急激に変わったことはない。ただ、制度として定着しているので、有機 JAS は流通にのせるには前提条件となっている。付加価値がつかなくてもやらざるを得ないのが有機 JAS。

消費者と何でつながっているかという、おいしいという評価が一番のつながりだと思う。道の駅よねぎわの加工所にかかわっており、加工所は米については特別栽培のものしか扱っていない。客の反応を見ると、特別栽培や有機栽培に関心がある人はほんの数パーセント。何に関心があるかという、米なら「つや姫」、枝豆なら「湯あがり娘」のようなブランドに関心があり、有機 JAS、特裁表示に関心が向かない。ブランドと有機 JAS の間でうまく相乗効果を引き出せれば良いと思っているが、まだ手探りの状態。

#### 会長

今の指摘は鋭いと思う。

次は消費者の視点から見て、安全安心なものを確保することは重要か、環境保全に対して消費者の理解度はどの程度かをお聞きしたい

#### 委員

有機農業やエコ関係に関わるなかで、こんなに大変なのかという消費者としての思いがある。食育に関わっているからかもしれないが、安心安全という部分が消費者としては一番気になる。消費者も色々いて、金額を重視して購入する人間もいる。いくら安心安全・地産地消の話をして、基本は生活だと言う人もいる。食育活動に安心安全なものを使ってもらうのはありがたいと思うが、でも自分の生活は好きにさせてほしい、という話も聞く。それが実情なんだと思う。

でも、何かあった時に安心安全なものが良かったと必ずなる。金額を重視して購入する人がいるとしても、安心安全については伝え続けなければならないと思うし、食育活動をする中でも伝えていくことを理念としている。

今年、エコエリア農楽隊バスツアーに参加した。非常に楽しかった。一つひとつ吟味された場所、団体を見ることができ、その中で、環境保全に取り組み、子供たちを巻き込んで生き物調査を取り組む団体があった。有機について一般消費者はわかっていないと思ったので、よりよい理解を得るため

には、生き物調査のように、子どもたちを巻き込みながら、安心安全な土壌では生き物が生息していることを伝えていくことが大事。ただ、それが販路拡大につながっているかを考えると必ずしもそうではないという話だったが、地道に続けてもらいたい。一般消費者が参加できるようなものがこれからも続けば良いと思う。

有機農業に取り組む映画を見たが、強烈だった。ここまでやっているのだから高価でも仕方ないと思った。何かしら消費者から理解を得られるような仕組みをつくることができないかと思う。ここまで苦勞して、何が楽しくてやっているのか、ここまでやってくれるのか、と思ったので、その方々の思いを知れば、人は動くのではないかと感じている。

## 会長

非常に重要な、意外に消費者はわかっていないという意見。私も蒲田で講演会をしたときに、消費者に水管理の頻度は2週間に一回ぐらいだと思っていたと言われた。毎日水管理しているといったら驚かれた。ほとんどの人は詳しいことは知らないのだと思う。

## 委員

消費者という視点において、「つや姫」や「湯あがり娘」のようなブランドにまず目が行く。有機農業の表示に目をむけることが普段ない。興味ある消費者は見るかもしれないが、一般の人がシールを見てもなんのことかわからない、たくさん表示があって何が良いかわからないというのが正直な感想。

安全性という観点で見れば、「つや姫」は県として安全基準があるので、何を選んでも安全なんだと思う。安全性も含めてブランディング化されているのに、あえて有機栽培の「つや姫」を買う理由はなんだろうと思う。

あとはGAPをどう関わらせていくか。GAPは会社でいうISOと同じで生産管理に重視していると思う。過程を見える化して認知されていくものだと思うが、なかなか消費者には見えてこない。言葉ばかりが増え、消費者は何が良いのかわからない。

資料にもエシカル消費という言葉があり、非常に意識が高い方は関心があるのだと思うが、女性向けの情報誌で特集を見ても、何を伝えたいのか正直わからなかった。国は色々な視点を示してくるが、その中で山形県として何を押ししたいのかが伝わってこないと思った。有機がどの立ち位置にいて、どう押ししていきたいかわからない。今回のコンクールでも有機農業が事例として出てこない、消費者が目にする機会がないので、関心がないのだと思う。

食べられれば良いと考えている人にとっては、安くて手に入りやすいものでよい。安全であれば慣行栽培のもので構わないと思う。

そこで選ぶ理由として教育につながっていくのかなと思う。「つや姫」×「ブランド」として、健康づくりにすごくいい、精神の安定とか、何か客観的にできれば良いが、難しいと思うので、作っている側のストーリーを見せるとかの、選ぶ側への教育が大事になるのかなと思う。

## 会長

どんどん新しい言葉が入ってきていて混在している状態。国の方向と山形県の方向性をどうするかを検討することが大事だと思う。

品種が横軸の話だとすると、縦軸に慣行栽培や特別栽培、有機栽培があり、それらを掛け算していったほうがわかりやすいという視点も大事。大胆な発想が必要。どこかで議論していく必要があると思う。

他の委員からも意見を聞いてみたい。

## 委員

資料4-1の論点については、まさしくそのとおりだと思う。今後の方向を考えていかなければならないというのは非常に適切であり、その答えを出すのは非常に難しいとは思う。

今の議論に関連して、つまるところは差別化の問題だと思う。差別化として考えたときに、あるとらえ方をすれば、良いもの、悪いもの、安全なもの、安全でないものという非常に突出した考え方になる。慣行栽培が安全でないというわけではない。その違いが認識されないという意見があるが、ある意味その認識は正しいと思う。一方が安全で一方が安全でないというわけではないので、違いがないという考え方は正しい。良し悪しで考えるものはないと思う。かつて田んぼからイナゴがいなくなった時には、国の基準を満たして栽培している中ではあったが、イナゴがいなかった結果を見れば不安なものだと思う。かといって、人間に健康上の問題があったわけではない。当然イナゴがいなくなったというからには、問題はあったのかもしれないが。現状において、慣行と有機の違いを倫理的な部分で見出すことは難しいし、違うのではないかと思う。

最終的にはどう認識したらよいかを考えたときに、価値観や好み、生き方としての選択の問題なのかと思う。短絡的な基準で、識別をそこに求めるのは、本質的には浸透しないのではないか。なぜならそれが正解ではないからと私は思う。結論はでないが、そういった観点から考えていくことも大事だと思う。

## 2. 推進の枠組みについて

### 会長

GAP等々も組み込んだ枠組みがあるが、消費者から見てGAPの理解度はどういったものか。GAPと環境保全型を一緒にすることについてどういった感想があるか。

### 委員

GAPについて、最初は全くわからなかった。辞書で調べた記憶がある。圃場は特別な場所だと思っていたが、専門的な用語だと理解した。GAPについては、理解につながるというよりも、難しいなど思っている。

ただ、こういった制度は、基準とかレベルアップという意味では、必要な制度だと思う。

GAPとは関係はないが、地産地消は大事にしてもらいたい。最近のスーパーは地元産の生産物を意識して売り場においていると感じる。置賜地域、米沢市では大手スーパーが力を入れているように思う。ぜひ地元のものを使ってほしい。年間をとおして、特に冬場は庄内地方のものがでるようになった。地産地消のコーナーも広くとってある。地元のものに人が集まっていると感じている。多少値段は高くなるが、地元のほうが見える、安心という価値観があり、地元のものが増えるというのは、安

心感があると思う。

#### 委員

GAPはこの会に参加したからわかった。オリンピックで必要とされる基準になっていることはなんとなく理解したが、消費者はほとんどわかっていない。

農家もある程度の規模じゃないとGAPに取り組まないのではないかと思う。県内に多い小規模農家だと、GAPに取り組む辛いのではないか。より良い農業経営、安全性向上につなげていく指針ではあると思うが、それをどう消費者に伝えていくかは難しいと思う。オリンピックがひとつの契機になると思ったが、オリンピック関連の食のイベントに関しても、GAPについてPRしきれていないのかなと思う。

職業として農業を選択するときGAPの認証を取り入れている農家だから、働きやすいのかを検証する必要があるのではないか。

オリンピック以降もGAPが推進されていくのか不透明だと思う。

#### 会長

生産者サイドでもGAPは共通認識されていないので、かなり難しい分野なんだと思う。

言葉がたくさん入ってくればくるほど、消費者はさらに混乱するのかもしれない。

### 3. 推進体制について

#### 会長

枠組について、様々な組織や計画を一体的に推進してはどうかという意見があったが、一体的に推進するメリット、方向性についてお聞きしたい。

#### 委員

方向性について意見を述べるわけではないが、現状のままではわかりにくいのではないかと思う。取り組むにしても、発信するにしても、もう少しわかりやすくしたほうが良い。

ただ、私の認識も問題として共感するということまでである。

#### 会長

わかりにくいものをわかりやすくするには、大胆な切り口が必要。

生産者側だからわかることと、消費者側だからわかることが、同じではないため、実際は理解されていないことも多いのかもしれない。

### 4. 推進施策について

#### 会長

最後に全県エコエリア構想についての感想、アイデアを教えてください。

## 委員

「エコエリアやまがた」については、当初からわかりづらいと思っていた。とはいえ環境保全型農業も漢字が多く若い方には受け入れにくいと思う。エコエリアという言葉が概念的な言葉で、有機だけではないので、まとめてPRしていくしかない。

「山形の有機農業」「山形のGAP」のように入口を変えていくと単純でわかりやすいのかなと思う。有機を伝えたいのにエコエリアのようなPRだと分かりづらい。エコエリアを県民のみなさんに定着させるぐらいの予算をかければ浸透していくのかと思うが、長い時間が必要だと思う。

## 委員

エコエリアはわかりづらい。環境保全型農業も堅苦しい。何かなじみやすい表現があれば良いと思うが、一方で、GIなどたくさん言葉があるのに、今から新しいものを打ち出して定着させるということは、相当な予算、準備期間と労力が必要だと思う。中途半端な取り組みではダメで、相当な覚悟を決めて、取り組まないといけないと感じている。

## 委員

現場的には、エコエリアという言葉はそんなに難しい言葉ではなかったが、今となってはエコファーマーも特裁も有機もなんでも入っている言葉であり、明解に説明するには難しい言葉かなと思う。

そもそも特別栽培という言葉は消費者には難しい。慣行栽培が何も表示していないので、特別栽培は5割減でこんなに農薬を使っているのかとみられてしまう。

聞くところによると国際基準が有機JASとGAPの2本立ての流れになっている。世界的な流れで、有機は良くも悪くもJASの制度があるので、それに縛られ続けていくと思うが、特別栽培はこれからどう維持存続していくのか、その方向性が心配だ。

## 委員

エコエリアについては、これから新たに何かを、というのは労力を考えればかなり大変だと思う。本当に消費者によって考え方が全然違う。若干ではあるが必要としている人もいるので、少ない人のためにも進めていってほしいと思う。

今のやり方ではなく、より具体的にすすめていく必要があると思う。ネーミングについても、誰でもわかるようにするのが大事。生産者がわからないと言っているものは、消費者は尚更わからない。内容は良いと思うが、具体的にしておわかりやすくする必要がある。

置賜総合支庁のイベントで、親子で有機農業生産者の枝豆を収穫するイベントがあった。そういった具体的な体験で理解が深められると思う。具体的にしてお理解を得て、進めていくことが必要。

## 委員

今まで消費者側からの意見を述べてきたが、私の家は父親の代まで十代以上続いた農家で、自宅で食べる野菜は無農薬だった。出荷する野菜は農薬をつかったきれいな野菜。父は「農家は一軒一軒が社長、農家は自分の裁量でいくらでも収入を増やせる」というのが口癖だった。

トイレの糞尿を堆肥にするのが当たり前の時代から、農薬を使うことで農業が発展してきた経緯もあると思う。農薬を使うことで収量も増やして販売し、収入につなげてきたのに、今更手間暇かけて収量も減らしてという、エコエリアというのは、時代を逆行しているのではないかと思う。農家自体

は楽しんで収入があれば良いというのが今までの流れだったと思う。調理してしまうと食材の味はいくらでも変えて提供できる。

有機農業、特別栽培したものを料理に使用して、お客さんに美味しいものを出していけば、広告塔ではないが、広めていく協力はできると思う。流通と価格の面で常に供給できるようにしていければ、料理に使っていけると思うので、よろしく願いしたい。

#### **オブザーバー**

有機栽培、特別栽培等、それぞれに達成している基準があり我々の機関で認証している。その中で言葉としてわかりにくいのは特別栽培だと思う。特別快速と快速特急とどちらが早いのかと同じようなものでわかりにくく、そのあたりは国からしっかり考えてもらいたいと思っている。

GAPについては、農業における食品安全、環境保全の基準になっているが、すべての観点を適用基準まで上げるにはそれぞれのハードルがある。ただ、新たに農業を始めた人の農場管理基準や、管理方法としては理に合っているのではないかと思う。

#### **会長**

まとめということで、資料の論点については適切であり、今後進めていかなければならないという方向性だと思う。なので、今日の視点をまとめ、絞り込んでいながら議論していくことが大事かと思う。

今日はまとめきれないので、次の話し合いの機会に考えていきたいと思う。

#### **事務局**

色々な制度が複雑に絡み、全県エコエリア構想も意外とわかりにくい。

時代も変わったので、いろいろな面でわかりやすくリニューアルする必要があると感じている。次回の協議会は2月か3月に開催を検討しているが、論点をさらにまとめて、今後の方向性について枠組みを示したいと思うので、その際にいろいろなご意見をいただきたいと思う。

以上